漢末のレジスタンス運動

川勝義雄

目次

はじめに
一　逸民的人士と清流勢力
二　鄉邑秩序の分裂
三　豪族の自己矛盾
四　逸民的人士と黄巾
むすび——次の時代への展望

はじめに

かつて私は六朝の貴族政治體制の成立を問題にして、それが漢末のいわゆる清流勢力を母胎とすること、そしてこの清流勢力なるものの構造は、よって立つ原理として儒家的國家理念をもち、この理念にささえられた士大夫の廣汎な輿論を背景にして、名聲という形で指定せられるその代表的士大夫たちを中心に、相互の連絡と組織とをもった一つの統一體として理解されることをのべた。[1] それ以後かなりの年月を經過するうちに、右のような考え方に對していくつかの批判があらわれたが、なかでも增淵龍夫氏の次のような批判は、清流勢力の理解について重要な反省をうながすものであった。すなわち氏は、右のような考え方が「清流勢力をその指導理念にかけて理解しようとするすぐれて主體的な解釋であるが、當時の知識階級の現實の動きをやや理念化してとらえたきらいがある」として、「徐穉・姜肱らの逸民的風格をもった人士が、その逸民的生活態度を固く持することによって、宦官勢力に對しては勿論のこと、これを譏議する一般の知識階級の風潮にも批判的な態度を暗默の中に示している」ことを指摘して、理念化的

解釋のゆきすぎを警告するとともに、逸民的人士のこのような批判的態度をささえる社會的基盤の探究が必要であることを示唆されたのであった。[2]

私の考えでは、逸民的人士が當時の知識階級の一環をなすものであり、清流勢力が知識階級を主體として構成される以上は、逸民的人士を清流勢力から切りはなして考えることは不可能であると思われる。したがって、逸民的人士をささえる社會的基盤の探究は、必然的に清流勢力の社會的基盤と關連せざるをえないのである。私は前稿においてその點の考察が不充分であったことを反省し、增淵氏の出された示唆を考慮しつつ、清流勢力――逸民的人士を一連のものとして、それがどういう社會的基盤から生まれるかという問題に、私なりの理解をつけてみたいと思うのである。

ところで、このような知識階級の批判ないし抵抗運動の基盤いかんの問題は、さらに下層の貧農層の抵抗にも關係する。貧農層の抵抗は、いうまでもなく漢帝國を瓦解せしめたかの黄巾の大亂となって爆發する。したがって、清流――逸民――黄巾は、二世紀後半から三世紀のはじめまで、五〇年以上に及ぶ一連の巨大なレジスタンス運動として相關的に把えねばならないと思うのであり、このように長期にわたる社會各層の巨大なレジスタンスは、漢から六朝への社會發展の方向に大きな影響を與えずにはおかないであろう。社會史的に見て、この一連のレジスタンスが基本的には何に對する抵抗であったのか、その抵抗は社會發展の方向にどのような作用を及ぼしたのか、このような大問題が我々の眼前に立ちはだかってくるのである。問題の大きさはこの小論のよく覆うところではあるまい。充分な論證のためには、より多くの紙數を必要とするでもあろう。しかし、私は僅かな資料からでも、あえて一應私の理解しえた大筋を提示し、今後のより深い檢討の足場を假りに作っておきたいと思うのである。

まず最初に、增淵氏の提起された逸民的人士というものを、清流對濁流の對立の外に存在するいわば第三勢力と考えるのではなく、[3]やはり清流勢力の外延において考えるべきではないか、という問題から入ってゆきたいと思う。

一　逸民的人士と清流勢力

後漢書の撰者・范曄の考えによれば、逸民とは「王侯に事えず、その事を高尚にする」人々、すなわちかの巣父・許由や伯夷・叔齊の生き方に連なる人々であって、聖天子・堯や周の武王の治世においてさえ仕えることを拒否したもの。いわんや我々がいま問題にするような汚濁の時代には、全く「塵を絶って反らず」、「邪嬖の朝に當る」時勢に對して「抗憤して顧みざる」ものであった。それは同じく抗憤するものではあっても、俗塵の中において狂奔する清議の徒とは範疇を異にする。そのことは「陳留老父」という、その名も生地もわからぬ人物の姿にもっともよく表われている。この人物は、黨錮事件がおこったとき、守外黄令の張升が黨人として免職處分にあい、故郷に歸る途中、友人とともに暗澹たる時勢をなげきながら、明日の命もはかられぬ身を悲しんでいるのを見て、「龍が鱗を隱さず、鳳が羽を藏めなければ、網羅の高く懸けられたるおりに、どこに逃げられるものか。泣いても及ばないね」と言ったまま、ゆくえも知れず、すたすたと立ち去った、と記される。[1] このような人物は范曄の脳裡に描かれた純粋な逸民の類型であって、本來ならば時空を超越したものが、たまたま黨錮事件のころに設定されたというおもむきをもつ。このような純粋逸民が、濁世の中で浮沈する清流の人士と類型的に大きく異なることは、陳留老父の張升に對する批判からも明らかである。かれらは俗世からの逃避と政治に對する絶縁において徹底的である。このような純粋逸民の後漢時代における増加、あるいはこのような存在に對する關心の増加、したがって逸民傳なるものの正史における最初の出現、ということ自體が檢討に値する問題を投げかけていることはいうまでもない。以下の考察においても、このような存在を全く無視するわけではないが、しかしいまさしあたって問題になる「逸民的人士」とは、右のような純粋逸民よりも、もう少し俗世と政治の世界に近い存在である。

増淵氏があげられた徐穉・姜肱らの「逸民的風格をもった人士」とは、後漢書卷八三（列傳第四三）にまとめられた人々を中心とする。范曄の序によれば、この卷には「邦に道あれば則ち仕え、邦に道なければ則ち卷いてこれを懷にする」かの蘧伯玉のような人物が集められるのであって、これらの人々は「時を候い」、「去就の概を識る」もの

とされる。いいかえれば、世に出てその志を行なう氣持は本來もっていたにもかかわらず、時勢に對する透徹した認識の上に立ち、時勢と自己とのギャップを知って、自己の志の實現はその當時において不可能と判斷し、仕えることは無意味と考えた人々である。それは逸民傳の人々のように、はじめから「王侯に事えず、その事を高尚にする」ものとは少しく類型を異にする。少くとも范曄の理解においてはそうであった。かれらには政治への關心があるのであり、政治への見識をもちながら、當今の世にのりだすことを斷念するのである。いわば處士であることを意志するのである。したがって、このような人物を「區別して載せた」後漢書の列傳第四三は、逸民傳に對してむしろ處士傳ということもできるであろう。

これらの處士は時勢に對して深い認識をもっていた。清議のもつ危險性を鋭く見ぬいていた。一般知識階級の輿論の中にあるデマゴギックな要素と、かれらの行動の輕佻浮薄さに批判の眼を向けていた。それが泥沼のような內朝の政爭にまきこまれ、宦官勢力の反擊に口實を與える危險まで豫見していた。これらのことは增淵氏が指摘されたとおりであろう。それに加えて注意しておきたいことは、かれらの中にかなり早くから漢帝國の崩壞を豫見していたものがあったらしいことである。

延熹七年（164）、かつての太尉黃瓊が死んだとき、黃瓊に辟召されたことのある徐穉は、その辟召に應じなかったけれども、葬儀にはるばるかけつけた。哭しおわって、直ちに立ち去ったあと、會葬者のなかで郭泰らの名士たちは、使者をやって徐穉を追わせた。徐穉は使者に言った。「私のために郭林宗に禮をいってくれ。大樹がまさに倒れんとするとき、一本の繩で支えられるものではない。あたふたと休むまもなくかけずりまわるのは何としたことか」[5]と。

清議の徒は、この時點においては漢帝國のたてなおしを目指しこそすれ、まだ大樹が倒れる必然性を豫想してはいなかったはずである。帝國崩壞の必然性を認識するか否かは、かれらの政治への姿勢に影響を與えることはいうまでもない。清議の徒と逸民的人士の間に態度の差を生じた契機の一つは、このような認識の有無にあったと想定することができるかもしれない。

ところで、はじめにのべたように、逸民的人士を純粋な逸民から區別して、むしろ處士たることを意志するものとするならば、いわゆる清流に屬する人々の中にも、かなりこれに近い人々が見いだされる。清流の人士と逸民的人士との間には、實は明確な一線を劃しがたいのである。

そもそも清流といい、黨人というものも、「天下豪傑及儒學行義者、一切結爲黨人」(後漢書靈帝紀)とあるように、その中には雜多な種類の人々を含むのであるが、一應黨錮列傳にのせられた人々を清流の中核的存在としておこう。郭泰はいわゆる八顧の一人であったが、辟擧には「並びに應じない」で、處士として一貫した人であった。そして、「危言覈論をなさず」、宦官に陷れられるすきを與えず、第一次黨錮事件にも、逸民的人士の一人・袁閎とともに難を免れることができたという(後漢書九八郭泰傳)。もっとも郭泰は本來、太學生の「浮華交會」的輿論における花形であったし、そのような風潮が「名を求め、利を蹈む」方向につながるとすれば、この風潮に批判的な逸民的人士とは明確に區別されるべきかもしれない。しかし、黨錮を契機とする清議の轉向を鋭く指摘した侯外廬氏らの考え方(中國思想通史第二卷四〇四頁以下)は、郭泰自身の中にも轉向を想定することを可能にするように思われる。彈壓を豫想した郭泰は、かなり早く逸民的方向に轉向した、あるいは用意周到に處士の態度をとりつづけた、と解することは不可能ではない。實際に、黨人の中で處士傳の人々ともっとも密接な關係にあったのは郭泰であり、かれの中には逸民的人士への方向が確かに感じられるのである。

しかし、郭泰と同じく八顧の一人とされた黨人・夏馥は、郭泰よりもはるかに逸民的な風格をもっていた。陳留の人・夏馥は「貧に安んじ、道を樂しみ、世に當いらるるを求めず。郡内には豪族多く、奢りて德薄し。(馥は)未だ嘗つて門に過ぎらず、躬ずから澤畔に耕し、經書をもって自ら悞しむ。是に由って豪勢の非る所となる。而して馥は志業いよいよ固く、海内に稱せらる。諸府こもごも辟し、天子は玄纁もて徵するも皆就かず。嘗つて喪に奔き、洛陽を經て、太學の門を歷たり。諸生曰く、これ太學の門なりと。馥曰く、東野生は帝王の庭に遊ぶこと希なりと。徑ちに去りて、また顧みず。公卿聞きてこれを追うも、得て見ざるなり」と記されている(後漢紀卷二二)。したがって、か

れは「時宦に交わらなかった」が、八顧の中に祭り上げられるほどの「聲名があったために、中官に憚かられ、范滂・張儉らとともに……黨魁とされて」指名手配を受け、匿名變装して逃げまわらねばならなくなった（後漢書黨錮傳）。

浮華交會の風潮うずまく太學を無視し、「安貧樂道」の生活態度をとった黨人夏馥は、むしろいわゆる逸民的人士と殆んど同じタイプに屬する。そして、生活態度を基準にして考えるならば、八及の一人に數えられる黨人・檀敷も、一時は仕官したことがあるにしろ、むしろ逸民的風格の持主のように記述されている（同上）。すなわち、黨人の中核的存在の中にさえ、逸民的人士が含まれていたのである。逆にまた、逸民的人士を集めた處士傳（後漢書巻八三）のなかにも、黄憲のように清流と甚だ密接な關係にある人がおり、かれらの多くは清流の人々から師表として尊敬され、または高い評價を與えられていた。清流の人々はこれらの逸民的人士を自分たちと異質の分子だとは考えていなかった。郭泰が母を失ったとき、逸民的人士の徐穉がこれを弔いに行ったように、かれらもまた清流人士を避けるとは限らなかった。逸民的人士と黨人とは、袁閎と袁忠の場合に端的に表われるように、兄と弟であることもあった（後漢書七五袁閎傳）。

黨錮の網は逸民的人士の上にも投げかけられた。その網の目に捕えられたものは、夏馥をはじめ、かなりの數に上ったと思われる。一部の逸民的人士がそれを免かれることができたのは、かれらがもともと宦官政府の目から見ても、明確に黨人と區別できるものであったからかどうかは疑問である。かれらは黨錮の網をのがれるために、無害の庶民と見られるべく、あるいは世界外存在たるべく、異常な努力を拂っている。「黨事のまさに作（おこ）らんとするや、袁閎は髪をざんばらにして世を絶った。迹を深林に投ぜんとしたが、母が老いて遠く遁げるわけにもいかないので、四面を土でぬりこめた戸もない部屋を庭に築き、窓からしか飲食の出し入れをしなかった」（同上袁閎傳）。それはまさにみずから先に牢獄に入った形である。また、黨錮のおこる可能性を二年前に豫想した申屠蟠は、「迹を梁碭の間に絶ち、樹に因って屋をつくり、自ら傭人に同じくした」。そのために、黨錮事件のときには「確然として疑論から免かれた」という（同上八三）。嫌疑を確然として拂拭するためには、普通は異常な無理を行なわねばならなかったのであろう。

要するに、いわゆる逸民的人士というものは、清流勢力から確然と區別される存在ではなかった。両者の間には一連のつながりがあったのであり、逸民的人士なるものも抵抗運動としての清流勢力を構成する一方の要素であった、あるいは一方の要素の延長線上にあった、としなければならない。かれらの清流に對する批判は、清流を構成する他方の要素に對する批判であった。他方の不純な要素については増淵氏の論文に詳しく分析されているが、なお一つ附け加えておくべきことは、夙に宮崎博士が指摘されたように、清流勢力を構成する他方の要素として、「八廚」にうかがえるような「財をもって人を救う」遊俠的富豪が存在することである（アジア史研究第二、一〇〇頁）。つまり、清流勢力は一般の「儒學行義」のものを中心にして、一方の極では遊俠的富豪に及び、他方の極では逸民的人士にまでつながる雑多な要素を含んでいる。このような雑多な要素が一つの政治運動—抵抗運動にまでまとまったゆえんは、かつて前稿において分析した。この勢力の上に黨錮の網がかけられたとき、その両極において網の目からのがれるものが出るのは當然である。その両極がどうなるかということは後に再び見ることにして、今は逸民的人士も清流勢力と一連の抵抗路線にあったことだけを確認し、逸民的人士と清流人士を含めて、かれらをして抵抗に走らしめたゆえんのものを、單にかれらの理念からだけでなく、實際にかれらが生きていた社會の基底の切實な利害關係の場から理解してみようと思う。その場とは當時の鄉邑社會にほかならない。

二　鄉邑秩序の分裂

先にあげた後漢紀によれば、夏馥は「奢りて德薄き郡内の豪族」に近づかなかったために、かれら豪勢にそしられたという。後漢書本傳によれば、夏馥は陳留圉の人。郡内の豪族とは、圉縣の富殖なる高氏と蔡氏であって、「郡人は畏れてこれに事えたが、馥だけは門を比べているのにこれと交通せず、それによって豪姓の仇する所となった」。そして、このように同じ城内の豪族の壓力に屈しなかったことが、かれの「聲名」を高める一つの原因にもなったらしく、その名聲によって「中官に憚かられ」、黨錮にまきこまれる結果になったのである。そのことは、かれが後に回顧して、「われ道を守り惡を疾みしを以ての故に、權宦の

陥しいる所となる」といった言葉に照應する。夏馥に關するこの簡單な記述を手がかりにして、地方のさまざまの城郭都市⑥の内部で當時どのような狀況が進行していたかということを、いくつかの點について考えてみよう。

第一に、富殖なる豪族の、周圍に對する支配意欲が、當時きわめて露骨な、「德薄き」形であらわれていたことである。豪族の支配についてはもはや多言を要しないであろうが、例の「連棟數百、膏田野に滿ちた」（仲長統昌言）豪族が、「苞苴（わいろ）を行って執政を亂し、劍客を養って黔首を威し、不辜を專殺して、市に死するの子なしと號す。故に下戸は崎嶇として足を跱（ふ）む所なく、乃わち父子低首して富人に奴事した」（崔寔政論）狀況が、規模の大小はともかくとして、我々の夏馥の場合にもあらわれている。「富殖」なる豪族に首をたれなかった夏馥に對して、これらの「德薄き」豪姓はこれを「仇」とした。それは輩下の「劍客」などの力をちらつかせた威嚇であったろう。つまり、當時の豪族は財力と武力によって、その周邊、すなわち鄉邑の一圓に露骨な支配を及ぼそうとする傾向が顯著である。私はこの傾向を一應、豪族の領主化傾向と呼ぶことにする。豪族のこの傾向はこの時期に始まるものでは勿論ない。しかし、崔寔や仲長統の言葉から見ても、この時期にそれの激化が見られるように思われる。したがって、小さな鄉邑では豪族の領主化は比較的容易であったかもしれない。しかし、圉縣のごとき縣城では、事情はそれほど簡單ではない。それが次に考えねばならない第二の點である。

圉縣の豪族には少くとも高氏と蔡氏の二つがあった。富殖をめざし、自己にくみせざるものを仇とする豪族が、鄉邑において複數であったということは、その鄉邑支配をめぐって互に衝突をおこす可能性が多分にあったことを想定させる。實際に、漁陽郡泉州縣の大姓冠蓋の家に生まれた陽球は、母を辱かしめた郡吏に對して、少年數十人を結集して復讐を行ない、郡吏の家を滅ぼした（後漢書酷吏傳）。郡吏の家はその地方における有力な家である場合が多かったであろう。また時代は溯って後漢のはじめのことであるが、汝南郡西平縣の門下掾・郅惲の友人に董子張なるものがあり、その「父と叔父が鄉里の盛氏の爲に一時に害された」（後漢書五九郅惲傳注引東觀記）。これに對して郅惲は客を將いて復讐を敢行したが、この東觀記の文は後漢書本傳には「父が先に鄉人の爲

に害さる」と簡略化されている。したがって、「郷人」といっても、盛氏という一族のかなり強い力を背景に感じさせるものである。我々の問題にする黨人たちの場合にも、八俊の一人に數えられる魏朗が、若くして縣吏たりしとき、「兄が郷人の爲に殺された」ので、「白日に刃を操って讐を縣中に報じ、遂に亡命して陳國に到った」（同上黨錮列傳）とあるが、その郷人とは、魏朗の郷邑における豪族ないしはその一味と解しても、おそらく大きな誤まりを犯すことにはならないであろう。[7] 牧野巽博士がすでに指摘されたように、復讐は漢代ではむしろ公然と行なわれ、しかも復讐の仕方は親族をはじめ賓客・交友など、できるだけ多くの黨與を集めて集團的に行なわれることが多かった。[8] それが片々たる侮辱を原因としておこる場合でも、右のような集團が平常からかなりの程度にできていたと思われる後漢時代には、侮辱そのものが豪族間の緊張對立を背景にしておこることが多かったであろう。「漢代には官が人民の私怨を報ずることを禁止していなかったので、民家はみな高樓を作って鼓をその上に置き、急があれば樓にのぼって鼓をうって隣里に知らせ、互に救助することにしていた[9]」という郷邑の狀況は、個々の小農民までがそれぞれ高樓をもって自衛態勢をとっていたことを示すのではあるまい。本來ならば、郷邑には高樓をもった亭があって、亭長が警察事務を取扱い、その郷邑の秩序維持に當っていたはずである。ところが、亭以外に民家がこのような高樓を作りはじめたとすれば、それはおそらく郷邑の中の有力者、つまり豪族からはじまったと考えるのが妥當であろう。郷邑の中にいくつかの高樓がそびえた狀況とは、亭の秩序、つまり郷邑の秩序が複數の豪族の自衛態勢に引き裂かれた狀況を示すと考えられる。

このような複數豪族の角逐による郷邑内部の緊張狀況を考えるとき、そのいずれとも交通しなかった夏馥や、「郷里の施惠を受けなかった」檀敷（黨錮列傳）の態度はよりよく理解できるように思われる。桓帝のとき、富人の王仲なるものが、逸民的方士の公沙穆に言った。「いま貨を以て仕うるもの多し。吾、子に奉ずるに百萬を以てせん。唯、子、用いられよ」と。穆はその厚意を謝しながらも、「賄を以て爵を求むる」より大きな姦惡はないと答えて辭退した。[10] この話は、郷邑の富人の施惠が、人材を官界に送りこむこ

とを目的としてなされる場合が多いこと、パトロンになることによって、その官人から將來利權を引き出そうとする下心があったこと、を想定させる。富殖なる豪族たちは、これらの人材を自己の陣營に引き入れて、これを官界に送りこむことからくる反對給付を期待した。しかるに、かれらはその期待をはねつけた。施惠を受け、恩義を蒙ることによって、將來の行動が制肘されるのを忌避したからである。ことに夏馥の場合には、蔡氏・高氏の兩方向からくる爭奪戰を避けて、どちらの期待にもそわなかったために、かえって双方から怨みを買ったと考えることもできるであろう。逸民的人士が多く發生する社會的條件の一つとして、鄉邑における豪族のあらゆる手段を用いた壓制という狀況、しかもその壓制が複數豪族の間のかなりはげしい競合緊張とからみあっていたという狀況、を想定することができるであろう。

考えられる第三のことは、このような鄉邑の複數豪族のいずれか、あるいはいくつかは宦官たちと相互利用の關係にあったらしいことである。鄉邑の豪族に首をたれなかった夏馥は、その「聲名」によって「中官に憚かられる」結果を招いた。ということは、崔寔のいわゆる「上家は鉅億の貲を累ね、苞苴を行なって執政を亂している」(論政)という指摘が、この場合にも該當するように思われる。「天下の良田美業山林湖澤を固こむ」ような貪欲な宦官に、苞苴の贈物は效果的である。その反對給付として、宦官に結びついた豪族は「不辜を專殺し、市に死する子なしと號する」ほどの人君的支配をその鄉邑に行なう保證を得たことであろう。このような宦官と地方豪族の相互利用は、鄉邑における複數豪族の競合緊張狀況を背景に設定すると、一そう理解しやすくなる。なぜなら、複數豪族の競合狀況においてこそ、その一つは他に優越するために、上部權力との結びつきをより一そう強く渴望するからである。そして、鄉邑の一豪族が上部權力の保證のもとに不法な支配を及ぼそうとするとき、他の豪族はこれに屈服するか、反抗するかの二者擇一を迫られる。ある豪族が宦官勢力につながる一方では、その路線につながれなかった豪族は、反對の路線に追いこまれざるをえなくなる。反宦官勢力としての清流勢力の中に、富裕な豪族が含まれることの一つの理由はここにある。したがって、當時の地方の狀況は、普通

に考えられるように、「郷邑の秩序が豪族によって維持されていた」（增淵黨錮論 文六二頁）のではなくて、むしろ複數豪族の對立によって郷邑の秩序が引き裂かれていたと考えねばならない。

第四に考えられることは、このような豪族の露骨な郷邑支配が、夏馥のような「書生」すなわち知識人にとって「惡」としてうつり、これを「疾む」行爲ないし態度、すなわちこれに對する抵抗にかりたてることである。どのような抵抗を試みるかは、もちろん條件に應じて異なるであろう。夏馥は「道を守った」。より激越な抵抗も當然あらわれる。魏朗は復讐を敢行して、郷里から亡命した。しかし、ここで注意すべきことは、郷邑における對立の中で抵抗した結果、右のように郷邑から疎外され、あるいは孤立した知識人を受け入れる環境が形成されつつあったことであり、むしろそれほど抵抗したことが「聲名」をあげる一つの原因になっていたことである。その環境とはいうまでもなく清議の世界であり、郷邑をこえて形成されるより廣い場である。郷邑の鬪爭はより大きな規模で、より廣い場に引きだされる。たとえば、扶風平陵の豪族・蘇謙は郡の督郵であったとき、宦官に結びついた美陽令・李暠の臧罪を摘發したため、後に李暠に殺された。蘇謙の子の不韋は慘烈な方法で李暠に復讐した。その方法の是非をめぐって議論が湧くと、清議派の領袖・郭泰はこれを是として蘇不韋に軍配をあげた。「議者は是に於て（不韋）を貴んだ」。やがて宦官派の司隸校尉・段熲は蘇不韋の一門六十余人を誅滅した。しかし、次の司隸校尉・陽球は反宦官的立場に立って、この段熲を誅滅した。「天下は以て蘇氏の復讐をしたものとしたのである」（後漢書六一 蘇不韋傳）。それは豪族の私鬪が宦官勢力とそれに反對する勢力との政爭の場にひきずりこまれたことを示すと同時に、司隸校尉の職權に表われるべき國家權力が、すでに公的性格を失って私的權力に變質したことを意味している。國家權力はすでに私權になり下がったのである。

私はここにおいて楊聯陞氏の黨爭に對する解釋、すなわち「清流・濁流の二つの豪族集團が政治的地位を爭った死を賭しての戰い」とする解釋のもつ一面の妥當性を思わざるをえない（清華學報十一卷四期）。しかし、重要なことは、そのような二つの集團が何故に生みだされたかの理由を、郷邑の

場にまで掘り下げて、そこから理解しなおすことである。私はその理由を、郷邑の秩序が複數豪族の間の競合緊張によって分裂しつつあった、あるいはすでに分裂していた、という狀況に求めたいと思うのである。

郷邑における豪族群の競合から、その一部はさらに露骨な支配を推進するために、上部の權力に結びついた。その權力路線はいわば豪族の領主化を推進するものである。宦官そのものは確かに豪族ではないけれども、宦官政府の性格は豪族の領主化路線にほかならない。そして、このいわば實權派路線の外に立たされた他の豪族と小農民は、豪族の領主化路線に對して抵抗した。その抵抗は、上部權力にくいこんで、公權によって實權派の罪惡を摘發し、處刑さえする積極的抵抗から、もっとも消極的に「道を守る」逸民的抵抗に至るまで、さまざまな形をとって表われる。これらのさまざまな抵抗を一つの勢力に結集する上で、儒家的理念にもとづく輿論の場の形成や、抵抗する人々をつなぐ人間關係が大きな作用を及ぼしたことは、すでに前稿に述べたところである。こうして一部の知識階級によって抵抗戰線の中核が形成されるにつれて、また同時にこうした抵抗に對する壓力が加增されるにつれて、この中核はさまざまの抵抗に求心作用を及ぼしてゆく。その右翼には、何らかの抵抗を行なう遊俠的富豪や、泥沼の政爭場裡における苟合的官僚までがつながってくる。その左翼には、知識人としての特權を斷念するような逸民さえも、その本人の意志とは無關係に、抵抗戰線の中核の方向に押しやられざるをえないのである。そして、この左翼の方向は知識階級ならざる一般の小農民や貧農の抵抗につながるであろう。[11]この方向については後にふれたいと思うが、いずれにしろ、以上のような抵抗を生みだす基本的な社會條件は、郷邑の支配をめぐる複數豪族のはげしい競合狀況であり、端的に言って豪族の領主化傾向による小農民の沒落と階層分化の進行であり、古い郷邑秩序の分裂・崩壞の危機的狀況である。有德なる賢者を登用せよ、その登用法たる郷擧里選を遵守せよ、という清議の徒の主張は、古い郷邑秩序の急速な崩壞狀況を背景にして、その中から生まれてくる秩序再建の要求にほかならないと考える。

三　豪族の自己矛盾

私は以上において、郷邑における豪族の領主化傾向と、複數豪族が競合する場合の對立緊張を強調し、それが郷邑秩序の分解とそれに對する抵抗を生むことを想定した。郷邑の中の豪族が、基本的にはそのような方向に作用する存在であるとしても、その方向を複雑化するさまざまの要因があるだろう。郷邑秩序の分解は地方によって進行度が異なるものであり、また郷邑の規模の大小によって、豪族の領主化傾向の上に、程度の差だけに止まらない複雑な相異を與えることもあるだろう。また、複數豪族間の競合緊張とはいっても、婚姻などによる協同親和關係もいりまじるであろう。そのようなさまざまな問題は本稿ではしばらく措き、豪族の領主化傾向を複雑化する、あるいはチェックする、より重要な問題として、豪族が儒教的教養を身につけた場合におこるその教養と本來的欲求との矛盾の問題をしばらく考えてみたいと思う。

先般來、我々の考察の手がかりとしてきた陳留圉縣の場合、すでに宇都宮博士が指摘されたように（漢代社會經濟史研究四六八頁）、書生の夏馥を「仇」とした「德薄き」、「富殖なる」豪族・蔡氏とは、實は當代一流の學者文人たる蔡邕の一族なのであり、高氏とはかつて「草屋蓬戸」に住んで「甕缶に儲なく」、「勤身清名」をモットーとした高愼（後漢初期の人）の同族なのである。蔡邕の父は「清白の行いが有り」、蔡邕自身の文によれば、「太山の黨魁・羊陟は、邕の季父・衞尉の（蔡）質と對門九族（甥舅關係）」であって、「本もと陟と姻家」であった（後漢書蔡邕傳及注引蔡邕集）。羊陟はいうまでもなく八顧の一人として黨錮列傳に明記されている人であり、また蔡邕は光和元年（178）宦官に陷いれられたのち、吳會地方での十二年にわたる亡命期間中は、「往來して太山の羊氏に依（たよ）っていた」のであった（同上）。このような清白なる高氏・蔡氏、ことに黨人羊陟と姻戚であった蔡邕一家と、郷邑の黨人夏馥を壓迫したかの德薄き富殖なる豪姓の高氏・蔡氏と、その間の矛盾をどう解釋すればよいのであろうか。周知のように、後漢時代には、ことに豪族層に儒學が廣く浸透した。豪族のもつ領主化傾向と、それに徹底させないかれらの教養――イデオロギー――との矛盾は、單に高氏・蔡氏にとどまらず、はるかに廣い範圍に及ぶ重要な問題である。

この矛盾に對する一つの解釋は、本誌本號において上田

早苗氏が提示されたように、清白なる高氏・蔡氏とはその一族の中で高慎ないし蔡邕の家系だけであり、この家系では清白を基礎にして世々二千石の地位を選びとろうとするのに對して、他の同族はむしろ郷邑における露骨な富殖の方を選ぶものであったと解すること、つまり同族の間に官僚學者家と地方殖産家とのいわば分業が成立していたと解することである。これはきわめて興味のある解釋であって、蔡邕は「陳留圉の人」と本傳に記されてはいるけれども、その一家が圉縣から八九十華里はなれた現在の蔡莊に住んでいた形迹があることは、[12]そのような解釋を支えるものであるかもしれない。おそらく夏馥を壓迫した圉縣城内の蔡氏と、蔡莊に住んでいたらしい蔡邕一家とは直接にはつながらないのであろう。しかしながら、住居が若干はなれていたにしろ、同族間の相互影響が全くなかったとは考えられないし、實際に蔡邕の生涯を調べると、かれ自身が右のような矛盾に惱んだあとをうかがうことができるように思うのである。

蔡邕は二十七歳のとき、宦官政府とはじめて關係をもった。かれ自身の作った「述行賦」の序にいう。「延熹二年（159）の秋、霖雨は月を逾えぬ。このとき梁冀は新たに誅せられ、徐璜・左悺ら五侯が貴を其の處に擅にす。又、顯陽苑を城西に起す。人徒は凍え餓えて、其の命を得ざるもの甚だ衆し。白馬令の李雲は直言を以て死し、鴻臚の陳君（蕃）は雲を救わんとせしを以て罪に抵る。璜は余が能く琴鼓をするを以て、朝廷に白し、陳留太守に敕して余を發遣せしむ。偃師に到りしおり、病みて前めず、歸るを得たり。心に此の事を憤り、遂に過ぎし所に託して、述べて賦を成す」と。霖雨を背景に、全篇陰鬱な重壓を感じさせる調子の、この述行賦は、最後の「言に旋り言に復る。我が心は胥なり分」[13]に至って、ようやく解放の悅こびを吐露するもののごとくである。宦官政府に對する嫌惡は、三十歳を少し過ぎたころの作と思われる「釋誨」[14]にも歷々とうかがうことができる。そこでは「外戚の門に卑俯し、助けを近貴の譽に乞い、……下っては熏胥の辜を獲、高くしては滅家の誅を受く」の愚をやめて、「璞を抱いて優游する」華顛胡老の生き方を自分の指針としたのであった。しかるに、かれが尊敬していたはずの陳蕃・李膺[15]らが殺された第二次黨錮の翌年、建寧三年（170）には、かれは三十八

歳にして司徒橋玄の辟召に應じ、これを手はじめに、あれほど嫌悪した宦官政府に出仕することになった。そこには、宦官政府からの出仕勸誘が強引をきわめたらしい事情[16]と、辟召の當事者である硬骨漢の橋玄を見こんだ事情があったかもしれないけれども、かれの官僚生活はいずれ破綻を免れえないものであった。光和元年（178）かれが四十六歳のとき、宦官一派の姦邪を記して直接靈帝にさし出した極祕文書が宦官側にぬすみ見され、やがてその報復を受けねばならなくなった。かれはあらゆる嫌疑をかけられて法廷にひきすえられた。そのときかれは、「本もと羊陟とは姻家なれど、豈あえて私黨を申助せんや」との辯明をも余儀なくされたのである。かれは僅かに大不敬棄市の罪を一等だけ免ぜられて、朔方五原へ流謫の身となる。その後の長い放浪生活のうちに、時代は破局に突入し、大混亂の中でかれは刑死の憂き目をみたのであった（後漢書蔡邕傳）。

かれの生涯がこのように悲劇的な經過をたどったことの一つの原因は、かれが鄉邑の富殖なる豪族の一家系に生まれたために、この豪族につながる宦官の要求をむげにことわりかねる立場にあったこと、[17]にもかかわらず、知識人としての彼自身の立場から、その路線に對する嫌悪と批判を抑えきれなかったこと、との間の矛盾にあったと解しておそらく誤またないであろう。社會史的觀點から見るならば、蔡邕の生涯は、富殖なる豪族の必然的な自己擴大的性格と、その露骨な發動をチェックする當時の知識人一般のもつイデオロギーとの矛盾を、一身の中に體現したものと見ることができる。

蔡邕の立場を右のように理解できるとするならば、教養を身につけた當時の豪族出身者は、多かれ少なかれこのような矛盾を背負った存在と考えてよいであろう。しかも後漢時代には、儒教的イデオロギーが豪族層にかなり廣く浸透したことを考えれば、私が前節において強調した鄉邑における豪族の領主化傾向とか、複數豪族のはげしい競合對立とかいうことも、この點でいくらかの限定が必要となる。なぜなら、それは豪族の領主化を不徹底ならしめる要因を豪族自身がもっていたとせねばならぬからである。[18]そのことはまた、當時の知識階級の抵抗が、單純な階級鬪爭としては割りきることができない複雜な樣相を示すゆえんでもあるだろう。[19]當時の豪族そのものが鄉邑秩序の破壞者

的性格と維持者的性格との矛盾を内包していた。そのどちらに傾くかに際して、イデオロギーの作用がかなり大きい意味をもつ。したがって、清濁二流の對立は、複數豪族による郷邑秩序の分裂と、豪族群自身の性格的分裂と、郷邑秩序の破壞による豪族對小農民の階級鬪爭と、この三者がいりまじった複合的對立であり、それを清議という形で一つの抵抗運動にまとめたものは、やはり儒家的イデオロギーであったとしなければならないように思われる。

このような基盤の上で激發した黨錮事件は、右のような對立關係に對していかなる作用を及ぼしたであろうか。その問題は黄巾にも當然關係してくるであろう。

四　逸民的人士と黄巾

二回にわたる黨錮事件、なかでも徹底的に行なわれた一六九年の第二次黨錮によって、清流勢力の中核であった「儒學行義」の官僚層は粉碎され、その勢力は官界から一掃された。先にのべた抵抗戰線の右翼は、これによって戰線から脱落し、宦官政府の側に吸收されていったと思われる。そこに吸收された知識人の抵抗はもはや統一を失って散發的となり、そのたびに各個擊破されたことは、先に蔡邕の場合に見た如くであった。そして、宦官政府の方針は、一七八年の賣官に具體化されたように、「公卿州郡より下、黄綬に至るまで、各々差の有る」錢額を納めることによって官爵が與えられた（後漢書五。崔烈傳）。銅臭紛々たる宦官政府の機構は、いわば富殖の程度を基準にして權力が體系化されたものといってよく、それは先般來のべてきた富殖豪族の自己擴大の傾向に一致するものとしてよいであろう。すなわち、一六九年以後、權力機構が決定的に濁流勢力に握られてからというものは、先に示した豪族の二面性のうち、富殖の自己擴大方向――領主化傾向――郷邑秩序の破壞者的性格の側面が、優越して前面に出てきたにちがいない。これ以後の十數年の間に、郷邑秩序の崩壞は加速度的に進行し、豪族の郷邑支配によって中小農民の沒落と流亡が激化し、かくして生み出された厖大な貧農層と富殖豪族層の對立、ひいては富殖豪族層の權力機構になりおわった宦官政府との對立が、基本的な對抗關係として大きく前面に出てくるのである。第二次黨錮以後の情勢は、二面性をもった豪族群の複雜な對抗關係に一種の整理を與え

た。この間における中小農民の貧農化は右のような基本的對抗關係の進展とともに、饑饉と災害によってさらに拍車をかけられていった。貧農のこのような加速度的な增加こそ、この期間における太平道の急速な傳播と、それによる貧農層の組織化とを可能ならしめた基本的な社會條件にほかならない。

一方、もともとこのような傾向を阻止しようとしていた知識階級の抵抗は、どうなってゆくであろうか。黨錮事件は知識階級の抵抗戰線に大打擊を與えた。その中核であった儒家官僚群は壞滅し、右翼は戰線から脫落した。したがって、戰線は必然的に左翼に收縮する。この場合、左翼とは逸民的人士の方向であり、民衆の側への接近である。

侯外廬氏らはいう。「政治上の黨錮と時を同じうして、思想上にもまた清議の禁錮があった。禁錮された清議は轉向を開始して、別に出路を求めざるをえぬ。その結果、清議は轉じて清談となった。是非臧否することから、（阮籍の）〝玄遠を發言し、口に人物を臧否せざる〟方向に到り、形骸化した名教から名教の否定に向った」。その轉向の契機は、「人倫を善くすと雖も、危言覈論を爲さなかった」郭泰や、郭泰と同樣に「實を避けて虛についた」徐穉らの逸民的人士をはじめ荀淑・陳寔ら一群の人々にあった、と氏は指摘する（中國思想通史第二卷四〇四頁）。黨錮を契機にして、清議が一擧に魏晉風の清談に轉向したかどうかは問題であるとしても、この際に知識人の思潮が「隱逸君子」（同上四〇九頁）の方向に傾斜したとするのは卓見であろう。「隱逸君子」というものは、最初に引用した「陳留老父」のごとき全く無名の逸民にはならなくても、「自ら傭人に同じくした」申屠蟠や、「卜を賣って食を給した」姜肱のように、その生活態度は無學文盲の庶民の生活に近づいている。「世を避けて」「隱居」した學者の思想と行動が、この時代には圖讖・方術・老莊と混在して、民衆の側に接近した性格をもつことは、すでに宮川尙志氏も說かれたところである（六朝史研究宗教篇八一頁以下）。實際に我々が問題にする逸民的人士の袁閎は「身を潛めること十八年。黃巾の賊が起って郡縣を攻沒し、百姓が驚き散じたとき、閎は經を誦して移らなかった。賊は相約して語げるよう、其の閭には入りませんと。鄉人は閎のところに避難して、皆全免するを得た」という（後漢書袁閎傳）。儒家の經典たると、道家の經典たるとを問わ

ず、經典を誦すること自體がこの時代に魔術的な目的をもったことは、すでに諸先學によって指摘されている。袁閎の誦經が黄巾・五斗米の徒の誦經と同一類型に屬することはいうまでもない。そして、このような同一類型の行爲を行なう逸民的人士の住地に對して、黄巾が侵入しなかったという記述を私は注目したいと思うのである。徐穉の子の徐胤もまた隱居して誦經していた人であるが、漢末の寇賊はみな胤の禮行を敬して、「約敕して其の閭を犯さなかった」という（同上徐穉傳及注引謝承書）。賊が隱者の德に化せられる話は以前からあり、黨錮のために野にあって教授していた大儒鄭玄が、黄巾に敬意を表されたという話なども（鄭玄傳）、「螟不犯境」のような表現と同じく、單にかれらの德を顯彰する修辭にすぎないかもしれぬ。しかし私は、右のような表現の中に、一般民衆の逸民的人士に對する親近性を感ずるとともに、黄巾などの寇賊がかれらを「所謂賢人」（同上姜肱傳注引謝承書）と見なしたところに、當時の民衆運動が何を自分たちに近いと感じ、何に對して抵抗したかの方向をくみとりたいと思うのである。

ところで、フランスのシナ學者・チベット學者としてすぐれた業績を次々に發表されるR・A・スタン氏は大淵・福井・宮川諸博士をはじめ、日本の學界の業績を充分參照された上で、右のような廉直な儒者・マジシァン・隱士といった人々の行動のパターンが、黄巾・五斗米などのそれに類似することを確認し、これらの道教運動とそれに近似する行動の下部にある共通の基調を明るみに出そうとされた。[30] 私が多くの示唆を受けたこの極めて興味深い論文は、近く「道教研究」第二册に譯載されるので、詳しくはそれを參照して頂くことにして、ここではただ、道教運動の社會的側面に關する氏の論旨を要約するだけにとどめたい。いま言った共通の基調とは、賢者有德者を首長にいただいて共同體的生活 vie communale を營もうとする理想であり、共同體的生活の中から生まれる道德であり、そのような生活環境・社會環境そのもののイメージにほかならぬ（譯文五四頁）。黄巾・五斗米などの道教運動の「道德的社會的側面は、共同體的生活と賢者を首長に選びたいとする氣持、功德にもとずくヒエラルキーと重なりあった形での共同體組織 organisation communautaire 、そして理想國を實現しようとする意志、ということに表われる」（同上九四

頁)。道教運動の志向する共同體的側面はすでに大淵氏によってある程度指摘されたところであるが、[21] スタン氏の論文は、より廣い領域にわたる多種多様な諸事象——人々の行動様式・思考様式・作られたもの(アンスティチュシオン)——の類似パターンから、その底にひそむ下部構造をさぐることによって、全體の構造連關を明らかにしようとするものであった。ただ、スタン氏の究極の意圖は、紀元二世紀の道教運動の底に見られる全體的構造連關を、後世のいわゆる民間宗教への展望にかけて、中國の宗教的社會的構造の全體に迫ろうとするもののように思われる。しかし、我々が氏によって示された道教運動の構造を、紀元二世紀という時代に重心を置いて、何故にこの時代にあのように強烈な共同體冀求運動が激發したかを思うとき、上來のべてきた清流勢力——逸民的人士——黄巾とつらなる一連のレジスタンス運動の方向がかなり鮮やかに理解できると思われる。

先に私は、清流勢力——逸民的人士の抵抗を生みだす社會的條件は、鄉邑の支配をめぐる複數豪族のはげしい競合狀況であり、それによる小農民の沒落、階層分化の進行であり、古い鄉邑秩序の分裂・崩壞の危機であると想定した。古い鄉邑秩序とは、鄉邑の賢者・有德者がスムースに「鄉擧里選」されていたような一種の共同體秩序にほかならない。清流——逸民の抵抗とは、このような共同體秩序を崩壞せしめる力に對する知識階級の抵抗であった。崩壞力として働く豪族自體が知識階級である場合の自己矛盾によって、崩壞作用と抵抗の兩面に複雜な要素がからむにしても、抵抗が共同體秩序の崩壞に對する阻止を意圖することにかわりはない。しかし、この知識階級の抵抗が黨錮によって挫折したのち、鄉邑秩序の崩壞は加速度的に進行した。これに對する次の抵抗エネルギーは、もはや中間層たる知識階級から出るのではなくて、鄉邑秩序の崩壞過程から析出された無學な小農貧農大衆の宗教的組織化から出ざるをえなかった。かれらの「蒼天已死、黄天當立」のスローガンは、いまや鄉邑秩序の破壞力——富殖豪族の權力機構となりおわった漢帝國を打倒して、かれら自身の共同體秩序と宗教的「德」によるヒエラルキーの樹立を標榜するものにほかならない。これらの民衆が望む道教的共同體秩序と、知識人の志向する儒教的共同體秩序との間に、あるいはその底に、共通の類似パターンが存在することをス

タン氏は説明した。この第二次の民衆レジスタンス運動の底には、黄巾・五斗米が逸民的人士と地下に潜行した清流殘黨に連結する可能性は確かに存在した。一八四年、黄巾の亂が勃發した直後、宦官呂彊は、久しく彈壓された黨人が黄巾と合謀する危險を警告した（後漢書靈帝紀注）。かくて黨人大赦令が發布され、「唯、張角のみは赦さぬ」との詔勅が出た。それは黄巾と知識人との間の、おこりうべき連合戰線に對する分斷作戰にほかならない。その作戰は功を奏したと思われるが、とにかく黄巾と黨人との合謀に對する危惧があったということは、今までのべてきた清流――逸民――黄巾の抵抗が、同じ路線に對する一連のレジスタンスであったことを示している。それが宦官の牛耳る後漢政府に對しての抵抗であったことはいうまでもないが、重要なことはその後漢政府の性格である。それが古い共同體秩序を破壞する富殖豪族の權力機構に化していたこと、つまり豪族の領主化傾向を推進する權力機構になっていたこと、が重要なのである。宦官そのものはいうまでもなく豪族ではない。しかし、宦官政府の性格はすでに領主化しつつある豪族の政府になっていた。その政府に對する抵抗とは、基本的には豪族の領主化に對する抵抗であり、共同體的秩序の再建を志向するものであった。

漢末の抵抗運動に對する右のような理解は、直ちに漢代中期の赤眉の亂をどう理解するか、ひいては漢帝國を支える社會的基盤をいかに理解するか、という大問題につながらざるをえないであろう。私はここでそのような大問題に立ち入る餘裕はないけれども、最小限に必要なかぎりの大まかな見通しだけをのべておきたいと思う。

かつて河地氏は赤眉の亂の性格を考察されたさい、當時の三老・父老を中心とする共同體的な村落生活からかれらの意識が規定される面をのべ、豪族集團と對立した赤眉の集團は、豪族の強大化によって農民層の階級分化が進行するという事態を背景にしておこったものであり、その反亂はこの事態に對する小農民の抵抗である、という理解を示された。[29] 私は氏の理解を正しいと思うものであり、私が本稿にのべてきた漢末の抵抗運動の性格も、河地氏が理解された赤眉の亂の性格と全く符合すると考える。ということは、赤眉と黄巾との間に同じ事態がより強く、より深く、より大規模に進行したという理解にほかならない。しか

し、事態の進行は一直線ではなかった。「赤眉の巨大なエネルギーは豪族層をして〝民の思う〟漢王朝への服從を餘儀なくせしめた」であろう（河地論文二三頁）。南陽の豪族層から出現した光武帝の政府も、このようなエネルギーをまのあたりに見て、自己の王朝を〝民の思う〟漢王朝の方向にひきもどさねばならなかったであろう。少くとも後漢初期の三代はその方向への制御がきいたものとして理解できると思われる。しかし一世紀の末からは、豪族層から出た後漢政權の本來の性格が、ようやくこの制御力と確執する。豪族層そのものの中に確執と分裂が進行する。二世紀中葉以後のその顯在化はもはや上來のべきたったところで明らかであろう。

しかしここで重要なことは、「民の思う漢王朝」とは何か、制御とはどの方向への制御かという問題である。それは赤眉から黄巾までの抵抗運動の性格から考えて、「民の思う」ものが父老を中心とする共同體であり、「民の思う漢王朝」とはそのような共同體の上に立つ漢王朝であり、少くともそれを溫存する漢王朝にほかならない。河地氏はいう。漢帝國という「デスポティズムは、封鎖的な共同體的村落を溫存・利用しつつ、その中から成長する土豪層（父老・三老――筆者補）を上から摑むことによって支配體制をかためていこうとしたのである」と（同上一九頁）。私はむしろデスポティズムというものをはじめに措定するのではなく、その反對に、このような父老（この段階で土豪と呼んでよいかどうかはしばらく措き）による共同體そのものが、自己の秩序の維持と存續のために、より上部の權力を要求し、その方向の適合形として漢帝國が形成された面を重視したいと思うのである。このような考えは「漢の國家權力の基礎を（父老を中心とする）里の上に求める」守屋氏の說[29]に近いであろう。少くとも、漢帝國の國家理念として形成された儒教的イデオロギーは、このような共同體に基盤を置き、それを統率する國家の姿を、あるべき理想型として理念化したものであった。このイデオロギーが漢代に形成され、それがかなり強く、また廣く働きえたのは、漢代の社會にそれに近い現實が、ある程度あったからであろう。いまは證明する餘裕をもたないけれども、漢初文帝のころには、あるいはより自覺化された形では宣帝の時代には、漢帝國がそのようなものであるとする主張を裏づ

けるに足る現實的基盤があったのではないであろうか。[23] 赤眉が漢朝の復興を標榜し、後漢初期にはその方向への制御がきいたということは、それだけの現實的基盤がまだ殘っていたからであり、黃巾が「蒼天已死」と標榜したのは、それが殆んど失われて、現實の漢帝國の性格が全く異質のものに轉化していたからであろう。異質物への轉化とは、共同體に基礎を置いていた國家が、共同體に對する破壞者としての豪族の權力機構に變質しおわったことにほかならないと考える。

豪族の存在は確かに漢代を通じての大問題であり、共同體との角逐は常に存在した。國家權力も豪族の方にひきずられて動搖することは免かれなかった。しかし共同體秩序の側からする制御力がなおきいた時代までは、漢帝國の基本的な關係は共同體を構成する自由民とその上に立つ皇帝との間にあった。その關係の破壞者として働く豪族は、國家權力の自覺的な彈壓の對象になっていた。[24] しかし、おそくとも黨錮事件以後は、國家はもはや明確に豪族の權力機構でしかないものになっていた。そこでの基本的な關係は、したがって豪族對豪族、ないし豪族對小農・貧農の關係に轉化したのである。そのことは、この時期に大きな社會史的轉換期を設定せねばならない理由となるであろう。

以上、私は漢末の一連のレジスタンス運動から、はるかに溯って漢帝國の性格にまで言及した。次は逆に後の時代に向って、このレジスタンスが社會の發展方向にいかなる作用を及ぼしたかを考察しなければならない。しかし、それについては、また別に、さらに詳しく述べる必要があるであろう。いまは餘裕がないままに、その見通しだけを述べて結びにかえたいと思う。

むすび——次の時代への展望

一六六年と一六九年の黨錮事件を發生させたものは、鄉邑豪族の領主化傾向とそれを支える政治權力とに對する知識階級の抵抗であった。一八四年に勃發した黃巾・五斗米の大反亂は、知識階級の抵抗が挫折したあと、さらに加速度的に進む豪族の領主化に對して、廣汎な貧農層がおこした組織的な武裝鬪爭であった。根強く殘る知識階級の抵抗も黃巾の鬪爭も、本來同じ方向をもったがゆえに、一八四年の時點では、兩者の連繫がおこらないとも限らない情勢

であった。しかし、政府側の分斷作戰はそれの防止に成功し、攻擊は專ら黃巾に對して向けられた。組織の中核たる張角兄弟は反亂勃發からわずか一年もたたぬうちに討ちとられ、中心を失ったかれらの鬪爭は地域ごとに分斷された。しかし、その抵抗エネルギーは容易には抑えられない。「漢行已盡、黃家當立」の理想とスローガンは、一九二年ごろの青州黃巾に、まだしっかりと堅持されていた（魏志卷一注引魏書）。かれらの武裝鬪爭は、新しい共同體秩序の樹立という意圖にもかかわらず、結局は全國を戰亂と無秩序狀態につきおとしていったのであるが、しかしこのように強烈な抵抗運動は、豪族の領主化傾向に修正を強いる力として作用せざるをえないのである。その一つの重要なあらわれは、黃巾が意識すると否とにかかわらず、結果においてかれらの鬪爭が知識階級をバック・アップする作用をしたことである。それはどうして言えるであろうか。

一八九年、後漢政府は執政となった何進のもとに、舊黨人系を含む海內の名士・荀攸ら二十餘人を徵召した（魏志一〇荀攸傳）。各地の軍事指導者のもとに知識人が集まったことは一々列擧するまでもあるまいが、もっとも興味のあるのは、代表的な知識人の荀彧が宦官系の軍事指導者・曹操に協力をはじめたのはかなり早く、一九一年のことであった。このような現象は、黃巾によっておこされた大混亂に對處して、今まで豪族の領主化路線に立っていた支配階級がそれを修正し、その路線に抵抗していた知識階級と妥協—協同したことを示すものにほかならない。

しかし、さらに重要なことは、對立から協同へのこのような轉換が右のような上層の權力體において見られるだけではなく、社會の基部の鄉邑においても見られることである。たとえば、黃巾の襲來によって無秩序狀態に陷った東郡東阿縣城に秩序を恢復したのは、大姓の薛房らと知略の人・程昱との協同によるものであった（魏志一四程昱傳）。そして、この縣城を上部の權力體たる曹操に結びつけ、縣城の保全をはかるとともに、曹操の基盤を固める役割を果したのは、知識人たる荀彧と程昱との協力によるのであって、大姓と曹操とはこの仕事にかかわっていない（同上）。この例は次のことを考えさせる。

黃巾によってまきおこされた地方の無秩序狀態は、鄉邑存立の危機を前にして、對立していた大姓と知識人との協

同を促した。こうして秩序の回復した郷邑をより安全にするために、より強力な權力體へ結びつけるパイプの役割は知識人のものであった。上部の權力と下部の權力との間の媒介者となった知識階級は、上下の雙方に對して、それぞれ反對側の權力を背景に發言權を增す。少くとも、下部權力たる大姓に對して、上部權力を背景にもった知識人の優位は明らかであろう。大混亂のさなかにおいてさえ、知識階級が右のような形で上下の權力の間の媒介層となりつつあったことは、かなり重要なことだと思われる。これはもちろん、郷邑において大姓＝豪族の領主化が未熟な場合であるが、黨錮以來豪族の領主化が進んだとはいっても、社會各層の根強い抵抗と、第三節にのべた豪族自身のもつ自己矛盾によって、豪族の領主化が不徹底のまま、領主化反對の農民運動がうずまく大混亂期へと突入した郷邑はきわめて多かったであろう。したがって、多くの郷邑において、知識階級がこのような媒介者として働きうるケースもきわめて多かったにちがいなく、しかもかつて清流濁流の對立を經過しているだけに、媒介者となった知識階級の間には、横の連帶意識が根強く維持されていた。これらの知識階級は、したがって強弱さまざまの權力體相互を結びつける媒介者として、一つの社會層を形成することができた。私が前稿において、清流勢力から全士大夫團に發展したといったのは、正しく言いなおせば、知識階級がこのように横に連帶する權力媒介層を形成したことにほかならない。權力媒介層となった知識階級は、一方では下部權力たる地方大姓よりも優位に立ち、この強大化――領主化を抑える作用をなすとともに、他方では、下部權力の代表者、いわゆる「民の望」として、上部權力を支えながらも、その方向を規制する。かくて、この社會層は「士」という身分階層を形成し、その上に文人的な貴族制社會を成立せしめてゆくのである。

以上の經路は、豪族の領主化が不徹底な郷邑を基盤にして、その上に權力が形成され、整序されてゆく過程をのべ、その際に、知識人が權力體相互の結節點を握ることによって、やがて「士」の階層を形成しえたゆえんを述べたのであるが、もちろん地方によっては、豪族の領主化がはるかに進んだ地域もあった。今のべた東阿の南、乘氏縣の場合がそれである。そこには宗族賓客數千家を擁する李氏

がいて、その中の李乾は私兵部隊を率いて曹操に協力し（魏志一八、李典傳）、同じ一族の李進という人は、曹操の好敵手・呂布が乘氏縣に迫ったとき、獨力でこれを打ち破るほどの武力をもっていた（魏志武帝紀興平元年條）。この李氏はもはや乘氏縣一帶の領主と呼んで差支えない。これが上部權力たる曹操につながるとき、知識人の介在する餘地は必ずしも存在しない。李乾のように直接軍役奉仕を行って、そのかわりに鄕邑支配を認められれば足りるであろう。實際に、呂布の亂のとき、曹操が李乾を乘氏に歸らせて、周邊の諸縣を慰勞させたということは（李典傳）、所領地安堵に似た傾向が皆無ではなかったことを思わせる。そしてもし、この時點におけるような力關係が永續し、その傾向が定着すれば、曹操と、李乾からその子の整、從子の典へとうけつがれた權力體との間に、レーエン制的な關係が成立し、武士階級が形成される可能性はあったとしなければならない。しかるに、曹操の華北制壓が明瞭になったとき、李典はみずから請願して、部曲宗族萬二千餘人を乘氏縣から曹操膝下の鄴に移し、自分は「學問を好み、儒雅を貴び、賢士大夫を敬まい、恂々として及ばざるが若き」態度をとった。それは在地領主たることを放棄し、士大夫階級の前に屈服して、みずからその片隅につらなろうとする姿勢である。このことは、先にのべた權力媒介層としての知識階級——横につらなる「士」の階層——の力が、縱につながろうとするレーエン關係を横ざまに切斷したことを意味する。士の階層の形成は、武人領主の成立に抑止作用として働き、豪族をして武人領主となる方向から、文人的な士の階層に參加する方向へと、大きな性格轉換を強いたのである。そして、このことは華北全體において、乘氏縣のように強大な領主が成立しつつあった地方はむしろ少く、領主化の徹底を缺いて、知識人が活躍しうる餘地を殘していた地方、または豪族自體が知識人となって、第三節にのべたその自己矛盾から領主化への徹底を阻まれていた地方、の方が數的にはるかに多かったことによるのであろう。このような全般的な領主化の不徹底現象を生ぜしめた大きな原因は、本稿において考察してきたように、知識階級から貧農層にまで及ぶ一連のレジスタンス運動にほかならない。そしてまた、この運動が結局は戰亂時代にもかかわらず、ついに武人領主の階級形成を阻むとともに、文人的な士の階層を成立せ

しめたのである。

典型的な封建社會形成への動きをチェックし、文人的な士階層の上に立つ貴族制社會を成立せしめたこの巨大なレジスタンス運動は、先に見たように共同體の再建を志向するものであった。その運動がいかに巨大であろうとも、時代の逆行はできるはずもない。破壞された古い鄉邑のあとに、新しい聚落――村――ができるとき、新しい鄉村秩序は大姓と知識人との協同によって、というよりむしろ知識人の性格をあわせもった豪族を中心にして形成される。增淵氏が戰國秦漢との關連において詳細に分析されたかの有名な田疇の豪族共同體②は、私の考えではむしろ三國以後の、あるべき鄉村秩序の理想型である。家屬および宗人三百餘家を率いて徐無山中に移住した田疇は、擊劍を善くする任俠者であると同時に、「讀書を好む」知識人であった。その周邊に集まった父老的土豪たちの領導する總勢五千餘家の大集團は、右のような性格の田疇を「賢長者」として首長に推戴する。かれは刑法・禮法のみならず、さらに注目すべきことには「學校講授の業」をも制定し、集團全員の支持遵奉を得て、ここに豪族を中心とする完成された共同體ができあがる。それは豪族の領主化傾向と共同體冀求の傾向と、兩者を綜合した見事な制作品であり、山の彼方の遠くに設定されたところの、「道に遺ちたるを拾うものなき」理想鄉の趣きをもつ。それは、士階層に入る資格をもった地方豪族が、新しい地方秩序を作る際の理想型であったろう。そして田疇もまた、のちにその家屬と宗人三百餘家を鄴に移し、この大豪族共同體は、より小さな父老的土豪共同體に解體していったらしいのである（魏志一一田疇傳）。この理想像は長く人の心に殘ったろう。ただ現實には、それははかなく消え去って、實社會は領主化（縱の關係）と共同體的要素（橫の關係）との複雜不整備ながらみあいのうちに、士の階層を成立させ、また士庶それぞれの內部にも微妙な縱の關係を作りながら、縱橫錯雜した階層社會に進んでいったのである。（一九六七・二・二五）

註

① 拙稿「シナ中世貴族政治の成立について」史林三三卷四號（一九五〇）。以下これを「前稿」と略稱する。

② 增淵龍夫「後漢黨錮事件の史評について」一橋論叢四四卷六號（一九六〇）

③ 增淵氏が逸民的人士たちを第三勢力と考えておられると言えば、おそらく行きすぎであり、氏の本意ではあるまい。しかし、私が前稿において餘りにも清濁の對立を強調し、清流内部の種々相を捨象したために、その批判としてあらわれた氏の論旨から、人がこれを第三勢力として受けとる可能性はあるように思われる。

④ 以上、後漢書逸民傳。張升のことは同書文苑傳下を參照のこと。

⑤ 後漢書卷八三徐穉傳。後漢紀卷二二には黄瓊の葬儀のときとせず、別に手紙で郭泰に言ってやったことにしている。郭泰の死は一六九年、第二次黨錮の直前であるから、いずれにしても時期的にはかなり早いであろう。

⑥ 城郭都市を形成していた當時の鄕邑のイメージは、宮崎市定「中國における聚落形體の變遷について」（大谷史學六號）および「中國における村制の成立」（東洋史研究一八卷四號）に主として據る。漢代の聚落は鄕亭または鄕里と呼ぶ方が原義に忠實であろうが、本稿ではかりに鄕邑と呼ぶ。その内容は里制にもとづく鄕・亭であり、縣城の場合もこれに含ませる。

⑦ 增淵龍夫氏は、この二例を復讐が「豪族や士大夫の間にみられるだけでなく、同一の鄕の内部の一般庶民の間にも」見られる例としておられる（「中國古代の社會と國家」七八頁および九一頁注2）。つまり、鄕人という言葉を同一の鄕の内部の豪族でない一般庶民と見られたのであるが、鄕人は盛氏という一族であり、父と叔父を一時に殺したほどの力があったのに對して、復讐する側は客を率いて行ったのであるから、必ずしも鄕人が豪族ないしはその手先でなかったとはいえない。ことに時代が下るにつれて、豪族が發展すると考えられるから、魏朗の場合の鄕人の背景に、豪族の存在する可能性は大きくなるとしてよいのではなかろうか。

⑧ 牧野巽「漢代における復讐」（支那家族研究所收）。牧野氏の論文も前掲增淵氏の任俠的習俗に關する論文も、「ゾチオロギッシュな考察」に限定されたものであるが、今後はこれらの貢獻をヒストリッシュな視野から深めてゆく必要があろうと思う。

⑨ 太平御覽卷五九八所引僮約注。牧野前掲書四三五―四三六頁參照。

⑩ 太平御覽卷四七一所引典略および後漢書方術傳下の公沙穆傳。

⑪ かつて私は清議の徒の抵抗を左翼とし、逸民的人士の方を右翼と考えたことがあった（拙稿「六朝貴族制」歷史教育十二卷五號・二七頁）。それは抵抗の積極性と消極性を考慮したためであった。しかし、逸民の方がより民衆に近づいた存在であるというその階級的性格から考えて、本稿では左右を逆にして考えた。逸民の階級的性格については第四節を參照されたい。

⑫ 李村人「關於蔡文姬故里資料」、胡笳十八拍討論集（北京一九五九）所收、二五九頁。

⑬ 蔡中郎集外傳所收。末句の「胥令」は詩經の「君子樂胥」の方向であろうと思われる。なお、林春溥「鄭大司農蔡中郎年譜合表」參照。

⑭ 後漢書本傳所引。三十歲を少し過ぎたころの作というのは惠

棟の説による。

⑮ 蔡邕の陳仲舉・李元禮論の斷片が殘っている。嚴可均輯「全後漢文」參照。

⑯ 後漢書卷五六韋彪傳附韋著の傳に、このとき「詔書逼切」したとある。

⑰ かれがまだ陳留にいたころ、隣人の招待を受けて門まで行ったところが、中から聞こえる琴の音に殺意を感じて引き返したという話が本傳に見える。それは蔡邕の音感の卓拔さをたたえる話ではあるが、この話からかれが鄉里において甚だ用心深い生活を送らねばならなかったこと、そのような空氣がかれを結局は宦官側に押しやる一つの契機になったこと、を想像してもよいかもしれない。

⑱ 鄉邑における豪族の競合がチェックされ、表面化せずに微妙なバランスをもつ場合、鄉邑の知識人の役割は大きくなるであろう。王烈（獨行傳）や蔡衍（黨錮傳）などが鄉邑の爭訟の調停者として影響力をもつのは、そういう場合であるかもしれない。

⑲ 好並隆司氏は「荀悅の社會背景とその政策について」（岡山史學二號・七五頁以下）において周一良氏の用語によりながら、濁流派對清流派の對立を大地主層對中小地主層の對立とする考え方を出されたことがあるが、そう明確にはゆきかねるとせねばならない。

⑳ R. A. Stein, Remarques sur les mouvements du taoïsme politico-religieux au IIe siècle ap. J.-C., *T'oung Pao*, Vol. L, Livr. 1-3, 1963.

㉑ 大淵忍爾「中國における民族的宗教の成立」歷史學研究一七九・一八一號（一九五五）「道教史の研究」（一九六四）所收。

㉒ 河地重造「赤眉の亂と後漢帝國の成立について」歷史學研究一六一號（一九五三）

㉓ 守屋美都雄「父老」東洋史研究一四卷一・二號（一九五五）五七頁。

㉔ たとえば、賢者を用いよとの上疏の中で、左雄は「至於文景。天下康乂。誠由玄靖寬柔。克愼官人故也。降及宣帝。興於仄陋。綜覈名實。知時所病。……是以吏稱其職。人安其業。漢世良吏於茲爲盛。……」といい（後漢書九一左雄傳）、崔寔の政論にも、文帝・宣帝の治世は見習うべき「君臣和睦・百姓康樂」の時代と觀念されている。後漢時代の知識人の間には、そのような通念ができていたのであろう。

㉕ 豪俠が國家權力の末端に切りはなちがたくまつわりついて、彈壓を妨げ、あるいはゆがめていたことは、增淵氏前揭書八四頁以下に詳しい。しかし、この場合にもヒストリッシュな視野を導入して、そのまつわり方、彈壓の妨げ方など、公權力との關係に變化の樣相をさぐらねばならないと思う。豪族彈壓が前漢時代にことに嚴しく、かなりの效果をもったと思われるのに比べて、後漢時代にはもはや力の弱いものになって行く傾向は歷然としているであろう。

㉖ いま引用した三國志卷一四程昱傳に、荀彧は程昱を「民之望」と呼んで、その出身地・東阿とその隣りの范との二城を確保するように依頼している。

㉗ 增淵氏前揭書一六〇—一六一頁および一七〇頁以下參照。